
魔法少女リリカルなのは タイトル未定 『憑依？ T S チート物』

にーと

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは タイトル未定 『憑依？ TS チート物』

【Nコード】

N8672M

【作者名】

にーと

【あらすじ】

いつの間にか一面真っ白な世界にいた俺。あれ？ さっきまで教室にいたのに……。

続き投稿したらあらすじは更新します。

ぶろろーぐ まだ、幸せだった頃（前書き）

えと、まあ、頑張ります。

ぶろろーぐ まだ、幸せだった頃

(……………後一分……………)

少女は薄闇の中、ベッドの上で身体を丸めてじっと時が過ぎるのを待っていた。以前夜中に歩いた時に怒られてしまったからだ。少女自身としては怒られたことより帰ってきた時の姉の泣きそうな顔が辛かったのだが……。それから夜のお出かけは我慢して寝れない夜をベッドの上でじっとしている……。たまに姉といっしょに寝るがその時は寝れなくても寂しいことはない。

(5…4…3…2…1…0！)

待ちに待った午前六時になり布団を投げ飛ばすようにはぎ取った、花柄のカーテンをさっと開けて窓を全開にする。ベッドから降りると箆笥に近づき、今日着る服をささっと選ぶ。

パジャマの上着を脱いだところで、窓から入ってきた新鮮な空気に肌をなでられ肌寒いと感じる。十二月の朝の空気を無視してテキパキと着替えると最後に髪を頭の後ろで束ねてから姿見の前で一度自分の姿を確認する。

肩下まで伸びた金色の髪に緑の瞳、整った顔立ちが、まだ幼いながらも落ち着いた印象を与えていた。

彼女は姿見から視線を外して机の上のペンダントを手に取り声を掛ける。

「おはよう。アルト」

おはようございます。マスター

人の言葉を解するペンダントを首にかけ、鼻歌を歌いながら部屋を後にする。廊下を出て、たったたつと爽快なリズムで階段を降りると。階段の側面に作られた収納スペースから掃除機やモップなどの掃除道具を取り出す。子供の身体には大きすぎて使いにくいがこの身体はそれもあまり苦にしない。

掃除機はコンセントを使わずに身体から眼には見えないパスを繋ぎ思考のソースも分け渡す、パスから電流を流してスイッチを入れると電源が入り、掃除機が動き出す。そのまま掃除機はフラフラと独りでに家中のゴミを吸って回る、モップも同様だ。

掃除を我が先鋭達がやってくれているうちに（実際は彼女が動かしているのだが）朝食を作ってしまうおとりビングの扉に手を掛けた時に二階の扉が開く音がして足を止める。階段を見ると寝起きの女性がフラフラと階段を下りてくる。

「姉さんおはよ〜」

おはようございます。

「おはよ〜、二人とも。今日も早いね〜」

そんなこと無いよ。と少女は否定してからキッチンに向かう。少女の背丈ではまだキッチンまで届かないので宙に浮いて作業をするのだが、普通まだ幼稚園に通っているような少女や食材、包丁、フライパンが台所を飛びまわっているのは一般家庭では見られないだろう。

「ほら、姉さん座って座って」

洗面所から戻ってきた姉を椅子に座らせてからお皿をテーブルに運ぶ。既にキッチンには朝食のいい匂いが広まっていた。

「今日の朝食はご飯に味噌汁、ほうれん草にごま和えに焼き魚です」

「ホントに優希はご飯作るのが上手になったね」

マスターは色々勉強してますからね。この前も料理の本を買っていましたよ

優希と呼ばれた少女はえへへと照れながらいただきますを言う。早速一口口に入れたところで声がかかる。

「優希は今日はなのはちゃんと何をして遊ぶの？」

「ん、うまうま（ごくん）、ん」なのはは気まぐれだからね。行ってみないと解らないかな」

「そっかーでもやっぱり、四歳の女の子の相手は楽しくない？」

「いや、そんなこと無いよ。結構見て癒されるし」

「うんうん。そうだよー」

「……どうしたの急にそんなこと聞いて？」

優希が眉をひそめて聞くと、彼女の姉は満面の笑みで答えた。

「いやー優希ちゃんは大入っぱいから、ちゃんと子供の友達が出るか心配なんだよ、姉ちゃんは。恭也さんとも気が合うみたいだし」

「そんなこと無いよ、なのはは特別。この前公園で、生意気なガキじゃない。お茶目な男の子がいたから叩き潰し…… O・H A・N A・S I（なのは風）してあげたしね」

「そっかーよかったよかった。優希ちゃんにも男の子のともだちがいるんだねえ」

否定してるのは同年代のともだちなのだが。彼女は恭也のことだ
と思ってるらしい。実際一年前までは男だったりもするのだから
気が合うのも当然である。

その後はとくに取り留めることもなく、ご飯を食べ終えたので。
二人は職場に出かけることになる（優希はただ付いていくだけだが）
。掃除道具をかたずけてから出かける準備をする。さつと厚手のコ
ート（子供用）を羽織ってから外に出て姉を待っていると隣の家の
庭から声を掛けられた。

「やあ、優希ちゃん。今日もお出かけかい」
「おはようございます、八神さん」

そう、八神。はやての父親だ。今はまだ生きてるが、原作開始時
ではすでに死んでいる人である。助けようと思えば助けることも出
来るのだろうが、どうするかはまだ保留にしている。はやての父親
と二三話しているうちに姉さんがやってきて話を切り上げる。向か
う先は翠屋。姉さんは桃子さんの弟子？ なのだ。

道すがら木枯らしが吹いて二人の間をすり抜ける。私は平気だが
姉さんはそうではないので背筋を震わせることになる。私は姉さん
の周りの温度を操りながら姉さんの手をぎゅつと握った。それに
気づいた姉さんはこっちを抜いて笑顔を見せてくる。前の人生では
見ることの出来なかった愛情の籠もった笑顔だ。

「ありがと、優希ちゃん」
「べ、べつに、大したことじゃない…」

姉さんはふふつと笑ってから、足を止め空を見上げてこう言った。
私も姉さんの顔を見上げる形になる。

「優希ちゃんと出会ってからもうそろそろ一年になるね」

「そうだね…もうそんなにたったんだ……」

確かに姉さんと初めて会ったのは十二月二十五日、クリスマスのことだ、その頃からこの、他人から見たら便利な身体と付き合っていることになる。

「そうだ、お祝いしようよ！ ちょうどクリスマスだし、優希ちゃん記念日だね。あれ？ 優希ちゃんは誕生日っていつだったけ？」

「誕生日……」

あの頃は、特に変哲もない普通の平日だったと思うが、優希としての自分はどうかだろうか。初めてこの身体になった日。

「私は、普通に生まれた訳じゃないから。強いて言うならやっぱりクリスマスかなあ」

「あゝそっか。……じゃあ、クリスマスはお祝い事がいっぱいだね！ 私、ケーキ焼くよ！ 優希ちゃんのためにおっきいやつ期待して待っててね」

あゝ、気を遣わせたなゝと思いつつも、姉の優しさに感謝する。

「ありがとう。でも、ホントに一年になるんだね……」

私がこの世界に来てから。と言う言葉は胸に落ちて消えた。代わりに再び姉の手を取って歩き出す。一年前。私がこの世界に来ることになった出来事を思い返しながら。

第零話 『魂が解け合う時』 (前書き)

まあ、プロローグの続きみたいなものです。

第零話 『魂が解け合う時』

……………夢を、見ていた。

一人の少女の話だ。

俺は彼女の体の中で、彼女の目を通して世界を見ていた。

戦乱の時代だった。

彼女は、予言によって定められた王の世継ぎとしてこの世に生を受けた。

しかし王は嘆いた。

子は男子では無かったからだ。

たとえ王になる宿命を持っていようと、男子でないものを跡継ぎにすることは出来ない。

彼女は王の家臣の老騎士に預けられ、一介に騎士の子供として育てられた。

素朴で懸命な老騎士の下、彼女はその跡取りとして成長していった。

老騎士は魔術師の予言を信じていたわけではない。

彼女に己が主君と同じものを感じたからこそ、騎士として育てねなければならぬと信じ、その成長を願ったのだ。

だが、老騎士が願うまでもなく、彼女は誰よりも強くあろうと鍛錬の日々を重ねた。

崩壊し、死に行くだけの国を救えるのが王だけならば。

誰に言われるまでもなく、彼女はその為だけに剣を振るうと誓っていたのだ。

そうして、予言の日がやってきた。

王を選び出すために、国中の領主と騎士が集まった。

最も優れた者が王になるのならば、と誰もが馬上戦による選定を予想していた。

だが、選定の場に用意されていたのは岩に突き刺さった抜き身の剣だけだった。

剣の柄には黄金の銘。

”この剣を岩から引き出した者はプリテンの王たるべき物である”

その銘に従い、数多くの騎士が剣を掴んだ。

だが抜ける者はおらず、騎士たちは予め用意していた、馬上戦に

よる王の選定を始めてしまった。

まだ騎士見習いだった彼女には、馬上戦の資格などない。

彼女は人気の絶えた選定の岩に近づくと、躊躇う事無く剣の柄に手を伸ばした。

「いやいや。それを手に取る前に、きちんと考えたほうがいい」

振り向くと、この国で最も恐れられていた魔術師がいた。

魔術師は語る。

それを手にしたが最後、お前は人間ではなくなるのだと。

その言葉に、彼女は頷くだけで返した。

王になるという事は、人でなくなるという事。

そんな覚悟は、生まれたときから抱いていた。

王とはつまり、みんなを守る為に、一番多くみんなを殺す存在なのだ。

幼い彼女は毎夜それを思い、朝になるまで震え続けた。

一日たりとも恐れなかった日はない。

だがそれも、今日で終わりだと彼女は告げた。

剣は当然のように引き抜かれ、周囲は光に包まれた。

その瞬間、彼女は人でなくなった。

王に性別など関係ない。

ただ王として機能さえすれば、王の風貌など誰も気に掛けず、一顧だにされまい。

仮に王が女性だと気が付く人間がようと、王として優れているのなら問題になる筈がなかった。

剣の魔力か、彼女の成長もそこで止まった。

不気味と恐れる騎士も多かったが、大半の騎士たちは主君の不死性を神秘と讃えあげた。

そうして。

後に伝説にまで称えられる、王の時代が始まった。

新たな王の戦いは、まさに軍神の業だった。

王は常に先陣に立つ。

彼女の行く手をふさげる敵など存在しなかった。

戦いの神。

竜の化身とまで謳われたその身に、敗北などあり得ない。

十の年月、十二もの会戦を、彼女は勝利だけで終わらせた。

それはただ一心に、王として駆け抜けた日々だったのだろう。

一度も振り返らず、一度も汚れず。

彼女は王として育ち、その責務を全うしたのだ。

夢を見ていた……。否、これは夢ではなく記憶、この魂に刻まれた、私（俺）の記憶

空は薄墨に染まっていた。

黎明なのか、黄昏なのか。

広い空で、高い野原だった。

手を伸ばしても届きそうにない空と、手を伸ばせば掴めそうな雲。

そこは、かつて私（俺）が駆け抜けた戦場の一つだった。

今は従える騎兵もいない。

見渡す限り黄金だった草原もない。

鉛色に染まった空の下、広がっているのは、とっくに慣れた、戦場後にすぎなかった。

感情が湧き立たない。

私（俺）にとって、こんな光景は日常だったのだろう。

独り残った心には何も無い。

黄金の剣に身を預けた私（俺）は、一度だけ大きく息を吐いて。
ゆつくりと肩の力を抜いた。

戦いが終わったのだろう。

私（俺）は討ち滅ぼした兵士の骸を流し見た後、自陣へと足を運ぶ。

それが私（俺）の経験してきた戦いだった。

冷静な態度は今とまったく変わっていない。

私（俺）はどのような苦境であろうと、私（俺）だった。

そうして、王の夢を見る。

その剣を抜いた時から、私（俺）は人ではなくなった。

父に代わって領主となった後、多くの騎士を従える王となったからだ。

私（俺）はアーサー王ともアルトリアとも呼ばれ、騎士を目指していた私（俺）は、その人生を一変させた。

私（俺）は王の息子として振舞った。

多くの領土を治め、騎士たちを統べる身は男ではなくてはならなかったからだ。

王が少女と知る物は、私（俺）の父親と魔術師しかいなかった。

私（俺）は文字通り鉄で自身を覆い、生涯、その事実を封印した。

無論、不振に思う者がいなかったわけではない。

だが、聖剣を持つ騎士王は傷つかず、歳を取る事もない。

聖剣には妖精の守りがあり、持ち主を不老不死にする。

それ故、騎士としては小柄すぎる体を追求する者もなく、少女としか思えない顔つきも、見目麗しい王として騎士たちの誉れとなった。

事実、王は無敵だった。

そこに体格や容姿など付け入る隙はない。

蛮族の侵攻に怯える民が求めたものは強い王であり、戦場を駆ける騎士が従うものは優れた統率者である。

王はその条件を全て備えていた。

故に 真実、王が何者であるかなど追求する者はいなか

った。

女であろうと子供であろうと関係はない。

ようは、それが『王』として国を守ればそれでよいのだ。

新しい王は公平無私であり、戦場では常に先陣に立って敵を駆逐した。

多くの敵、多くの民が死んでいったが、王の選択は常に正しく、誰よりも上手く『王』をこなしていたのだ。

そこに疑う余地はないし、そもそも、王が正しいうちは疑う意味もないだろう。

戦場では負け知らずだった。

失われていた騎馬形式を再構成した私（俺）の軍は、文字通り自由に戦場を駆け抜け、異民族の歩兵を破り、幾つもの城壁を突破した。

常に先陣に立っていたのは、その背に国があったからなのか。

戦いに出る為には、多くの民を切り捨てねばならなかった。

戦いに出たからには、全ての敵を切り捨てねばならなかった。

国を守る戦いの為には、自国の村を干上がらせて軍備を整えるのは常道だった。

そういった意味で、私（俺）ほど多くの人間を殺めた騎士はいなかっただろう。

それを重いと、感じたことがあったのかは知らない。

こんな夢では知るよしもない話だ。

ただ、戦場を駆ける姿に迷いはなかった。

玉座に身を預ける時も、憂いに眼を細めることさえない。

王とは人ではない。

人間の感情を持つていては、人間を守れない。

その誓いを、私（俺）は厳格に守り続けた。

あらゆる問題を解決し、誰もが舌を巻くほど政務に励んだ。

一寸の狂いもなく国を計り、寸分の過ちもなく人を罰した。

そうして、何度目かの戦いを勝利で収め、幾つもの部族を乱れなく統率し、何百という罪人を処罰したあと。

”アーサー王は、人の気持ちが分からない”と。

そう、側近の騎士が呟いた。

誰もがその不安を抱いていたのか。

王として完璧であればあるほど、彼らは自らの君主に疑問を抱いた。

人の感情がないものに、人を治められる筈がない。

何人かの名のある騎士は王城を離れるようになり、それすら王は当然の出来事として受け入れ、統治の一部として組み込んだ。

見目麗しく、騎士たちの誉れであった王は、そうして孤立していった。

だが、それは王には関係のない些末事だ。

離れられ、恐れられ、裏切られようと、私（俺）の心は変わらない。

是非もない。

あの剣を手にとると決意した時から、私（俺）は感情など捨てたのだから。

そうして、私（俺）にとって最後の戦いが始まった。

バドンの丘での戦いは大勝で終わり、そのあまりに圧倒的な戦果から、蛮族たちは和睦を申し入れてきた。

もはや滅亡を待つだけだった国は、そうして束の間の平和を得た。

絶対的な英雄に頼る戦乱は終わった。

ブリテンはようやく、私（俺）が夢見ていた国に戻りつつあったのだ。

戦乱の時代は続く。

王として定められた少女。

聖剣を抜き、その時から歳を取らず、十二の大戦を勝ち抜いた偉大な騎士。

完璧であればあるほど敬遠され、長く続けば続くほど孤立するしかなかった王。

それか、彼女の正体だ。

それでも彼女はよくやった。

否、よくやりすぎた。

効率よく敵を殲し、戦の犠牲となる民は最小限に抑えた。

どのような戦であれ、それが戦いであるのなら犠牲はでる。

ならば前もって犠牲を払い軍備を整え、無駄なく敵を討つべきだと考えたのだ。

戦いの前に一つの村を枯れさせ、軍備を整え、異民族に領土が荒らされる前にこれを討ち、十の村を守る。

それが王として彼女の出した結論であり、事実、当時においてそれは最善の政策だった。

だが騎士たちは不満だったのだろう。

彼らにとって死んでいいのは異民族だけであり、戦いになれば犠牲など出さずに勝利するのが常道だ。

戦いの前から己が領土を手放す必要などない。

自分達は勝利するのだから犠牲など出ない。

犠牲など出ないのだから、王の行為はただの徒労だと考えた。

もちろん、それは彼らの夢物語である。

いざ戦いが始まれば、騎士たちは小さな村のことなど考えない。

それらは蹂躪されて当然のものであり、彼らが守るべき対象には入っていないのだから。

騎士たちは、敵に滅ぼされるのは当然だと言い、自分達では干渉がらせるのは大罪だと言う。

無論、そんな事は彼女にも分かっていた。

だが王にはそのような私情を挟めない。

彼女は私情を殺して決断を下し、彼らは私情を圧して従う。

そうして犠牲を払い、連勝を続けていくうちに国は安定した。

その代償は王への反感だった。

”王は人の気持ちが分からない”と。

ある騎士はそう残し、王城から去っていった。

……おかしな話だ。

誰も人として望まなかったというのに、人としての感情がなければ反感を持ったのだから。

かねてから王に不満を抱いていた騎士たちは、かの騎士が去ったことによつて、更に反感を強めていった。

あらゆる外敵と自国の問題を押し付け、彼女を追い詰めていったのだ。

破綻は見えていた。

度重なる問題が解決できなければ死。

全ての問題を解決したところで、その先にあるものも同じだろう。

だが、それは王には関係のない些末事だ。

離れられ、恐れられ、裏切られようと、彼女の心は変わらない。

・・・・・・・・それは、もうとっくに決めていたからだろう。

あの剣を手にしようと決意したときから、彼女は自らの感情など捨てたのだ。

もう何年も昔になった光景。

岩に刺さった剣。

それを前にして私（俺）は何を思ったのか。

気が付けば、後ろには見知らぬ魔術師が立っていた。

「それを手に取る前に、きちんと考えたほうがいい」

手にすればあらゆる人間に恨まれ、惨たらしい死を迎えるとも言った。

恐れなかった筈がない。

なにしろ、魔術師はちゃんと見せていたのだ。

その剣を取れば、私（俺）がどのような最後を迎えるのかという事を。

「
いいえ」

だが、それが私（俺）を決意させた。

自身の未来を見せられても力強く頷いた。

いいのかい、と魔術師は問いたです。

「多くの人が笑っていました。それはきっと間違いではないと思います」

剣に手をかける。

魔術師は困ったように顔を背け、

「奇跡には代償が必要だ。君は、その一番大切なものを引き換えにするだろう」

その、予言じみた言葉を残した。

そう。

私（俺）はただ、みんなを守りたかった。

けれど、それを成し遂げるためには”人々を守りたい”という感情を捨てねばならなかった。

……人の心を持っていたのは、王として国を守る
ことなど出来ぬのだから。

それを承知で剣を抜いた。

それを承知で、王として生きると誓ったのだ。

だから何度離れられ、恐れられ、裏切られようと、私（俺）の心は変わらない。

人としての心は捨てた。

幼い少女はそれを引き換えにして、守ることを望んだのだから。

その気高い誓いを、誰が知ろう。

戦うと決めた。

何があるうと、たとえ、その先に、

それでも、戦うと決めたのだ。

避けえない、孤独の破滅が待っている。

その終わりが、これだった。

カムランの戦い。

アーサー王が遠征に出立した後、一人の騎士が玉座を篡奪し、彼女の国は二つに分かれて殺しあつた。

遠征に出た王の留守を狙い、国を乗っ取った若い騎士。

男の名はモードレッド。

騎士王の姉モルガンの息子であるその騎士は、その実、騎士王の息子だった。

結論から言えば、女性であるアルトリアに子を作ることは出来ない。

だが、確かにモードレッドはアルトリアの血を受け継いでいたのだ。

アルトリアの姉であるモルガン　妹でありながら王となったアルトリアを恨む彼女の妄念が、どのような手を尽くしたのか定かではない。

彼女の分身として作られたモードレッドは、父を明かせぬ騎士として王に仕え、その座を篡奪する日を待ち、ついに反旗を翻した。

後にカムランの戦いと呼ばれる、アーサー王最後の戦いである。

遠征先でモードレッドの裏切りを知ったアーサー王は、疲れきった兵を連れて国に戻り、自らの領土へと侵攻した。

かつて従えていた騎士をことごとく斬り伏せ、自身が守っていた土地に攻め入った。

かろうじて自分に付き従ってくれた騎士たちも散っていく、最後に残ったのは、自身と、息子であるモードレッドだけだった。

両者の一騎打ちは、王の勝利で幕を下ろした。

……だが、無傷だったという訳ではない。

強い呪いで括られたモードレッドは死してなお剣を振るい、王にもはや癒せない傷を残したからだ。

それがこの戦いの終わり。

騎士王と言われた彼女の、最後の姿だった。

辛くなかった筈はない。

思えば、彼女の戦いで辛いものなどなかった。

十二もの戦いはそのどれもが身を裂くような戦いであり、これは、その最後に相応しい、もっとも大きな傷跡に他ならない。

領地に戻り、自国の軍を蹴散らし。

臣下であつた騎士たちを自らの手で処罰し、従つてくれた騎士たちを皆死なせ。

その果てに、カタチの上であれ、息子であつた騎士を倒さねばならなかった。

かつて自身が従えていた騎士をことごとく斬り伏せ、自身が守つてきた土地に攻め入った。

かろうじて自分に付き従つてくれた騎士たちも散り、自身の体も、

傷ついて動かなかった。

周囲には誰もいない。

今まで通り、何も変わらない。

胸にあるのは王としての誇りだけ。

私（俺）は、この結末を知っていた。

それでも得るものがあると信じたからこそ、ただ一点の汚れも出さず走り続けたのだ。

後悔などしていない。

無念があるとしたら、それはこの、荒れ果てた国の姿だけだった。

ふと視線を上げる。

この丘なら、遠く離れた城が見えるかもしれない。

だが、あるものは戦場の跡と深い森、そして、帰るべき湖が見えるだけだった。

そう。

駆け抜けるだけだった丘は、もはや越えられぬ壁となっていたのだ。

肩の力が抜ける。

そうして、初めて自分の意思で、私（俺）は聖剣から指を離した。

それで終わった。

この夢が終わるのは当然だった。

私の記憶には、この先などないのだから。

……だから、これはもう変えられない一つの結末。

頑張って頑張って、恨まれて、裏切られて。

国よりも人を愛していたことも知られず、無慈悲な王としてあり続け。

報われる事はなく、理解されることもなく。

孤立し、裏切られ続けた彼女が死を迎えようとしている、赤く染まった剣の丘。

第一話 『目覚めの時』(前書き)

親にパソコンのコードを没収されると言う罠…。今は親のノーパソで更新中。

アルトリアの記憶にはF a t eの全ルート(バッドエンド込)も含まれています。

第一話 『目覚めの時』

ん……………。

暗い、暗い闇の中、俺の意識は覚醒していく……………。

ここは……………？

目を開けようとするが指一本動かすことが出来ない。どうやら感覚は繋がっているようで、布が体を触れる感覚や車のエンジン音、人々の喧騒が聞こえてくる。

さっきの、記憶は……………アルトリアの……………？

そうじゃ。

うわっ！

なんじゃ、失礼な奴じゃのう。

どうゆうことなんだ？ あれは記憶が流し込まれたって感じじゃなかったぞ？

あれは、お前の魂と騎士王の魂を融合させたのじゃ。

融合ってどうゆうことだよ？

そのままの意味じゃよ。お前には儂の考えた設定でリリカルなのはの世界で生きてもらうからの。

はあ？ 聞いてないぞ。

言っていないしな。

そう言う問題じゃないよ……。はあ、もういいからほかに言っ
て無いことがあるなら教えてくれよ。

そうじゃな、まずお前の体は儂が作った特別製じゃ。

……どんな？

いわゆる神の体じゃ！ もちろんお前の希望はすべて満たしてお
るぞ（お前の想像以上にじゃがな）。

はあ……。それで？

……あまり驚かんのじゃな。神の体じゃぞ、神の力じゃぞ。地球
を素手で割ったり、物質を想像したり、出来るんじゃぞ。

やり過ぎじゃボケー！！

まあまあ落ち着け、ちゃんと最初は弱くしておいたから。あくま
で鍛えたらの話じゃ、物質の想像もお前の力量次第じゃからな。

それなら……。あんまり、良くないなあ。

おっ、着いたようじゃの続きはまた後じゃ。

何処に？ と、聞く前に。

ピンポンとインターホンの音が鳴り響いた。

第一話 『目覚めの時』 (後書き)

ステータス表書いた方がいいかなあ？

第二話 『男言葉はいけません!』 (前書き)

前回のサブタイ別に目覚めてねーじゃん。

第二話 『男言葉はいけません!』

ピンポーン

「はい」ドタドタ

チャイムが鳴ると女の人の声と足跡が聞こえてくる。いまだによく状況がつかめない。転生っていうのは赤ん坊から始まったり、空から落とされたりするんじゃないだろうか？

がちゃ、ドアの開く音、そして。

「あら？」

……………

「あら？」

玄関先に出てみると一台のトランクが置かれていた。あたりを見渡しても人の姿は見えない。

「落とし物かしら？」

口に出してみるがなんとなくそうではないと解る。これは私宛てだ。

「さて、どうしようかな」

結局部屋まで運んでしまった。トランクを見ながら考えてみる。

「開けちゃってもいいよね……」

家の前に置いてあったものだし、中を見ないことにはどうすればいいか判断がつかないし開けちゃっても仕方ないよね、うん。

「あれ？」

開けようと決意して（大げさ）トランクを見てみたのだが、鍵のようなものは付いておらず、トランクの側面に溝が一本入っているだけでどうやって開ければいいか検討もつかないのだ。

取り合えずこじ開けようとしたり、振ってみたり、両手で持つて落してみたりしたのだが、全く開く気配はなく、それどころか傷一つつかないので、そろそろあきらめようかなあ、とやけになってしまっていたのだろう、思わず言ってしまったのだ。

「開け〜ゴマ！」

……何やってるんだろうと、一気に冷静になって今までの行動を思い出し、恥ずかしくなってしまった。

いつの間にか日も沈んでしまった。いくら冬は夜になるのが早くても六時間近くトランクと戯れていたことになる。

そろそろ夕食の準備をしないと〜と立ち上がった時、今まで何の反応も見せなかったトランクから音が聞こえた。

ガチャ

「うっ」

トランクがまるで跳ね飛ばされたかの様に開き中に入っていた物が明らかになる。それは、真珠の様に白い肌で金色に光る髪に緑の瞳を持った、まるで人形の様な女の子だった。

「気持ち悪っ！」

訂正、白いどころか青い顔だった……。

第二話 『男言葉はいけません!』 (後書き)

はあ、今回も短め。

第三話 『状況把握する時』（前書き）

サブタイがずれ過ぎてる……。

第三話 『状況を把握する時』

「うつゝ、気持ち悪い…」

体を起して頭を振る。あの後女の人の可愛らしい声とともに揺れたり、突然の浮遊感と衝撃に襲われてすっかり平衡感覚が崩れてしまった。

吐き気に耐えながら状況を判断しようあたりを見渡してみる。今、自分はトランクの様な物に座っているようだ。トランクの内側は真紅の布が敷き詰められていて人型にくぼんでいる、おそらく発泡スチロールの様なものが詰まっているのだろう。トランクから人が出てくるなんてどこのローゼンだよ、と突っ込みたくなる。

さらに視線を巡らせると少し離れた所から女の人がかつちを見ている、おそらくさっきからの声はこの人のものだろう。ここまで0.1秒、頭の回転速くなったな。自分の事だけ。あれ？ この人、どこかで見た事あるような……。

「だ、大丈夫？」

「うつゝ」

また吐き気が襲ってきた。不味い、もう駄目……。

「せ、洗面所……………うつゝ」

「あわわ、大変大変……」

「……すみませんでした」

「い、いいよ。全然問題なし！」

“私のせいなんだろうな”

洗面所に連れて行って貰ったのだが結局はかずに地獄のような苦しみを味わった後。俺はリビングで女の人と対面していた。

（なんか文字が見えるんだけど……。声も聞こえるし）

女の人頭のうあたりに文字が浮かびあがってきて、それに合わせて女の人声が心の中に直接伝わってくる。

“それは心の声じゃ”

（うわっ！）

突然の声に思わず声に出そうになりそうなのを押しとどめる。

「？　どうかした？」　“驚いたように見えたけど？”

「な、なんでもないです」（おい！　どういうことだよ）

“なに、言つたろう神の体じゃと。人の考えぐらい読み取れるわい”

（考え？　心が読めるってことか！！）

“そうじゃ、そんなに驚かんでもよからう”

（冗談じゃない、プライバシーでもんがあるだろ普通）

“それは人間の話じゃ、おぬしはもう人間じゃあるまい”

（んな、むちゃくちゃな……人の心が読めたって嬉しくねーぞ。止めたり出来ないのか？）

“そりゃ出来るワイ、見えるなと念じれば見えないし、聞こえるなと念じれば聞こえんわ”

（そうか、切りかえられるんだな。見えるな 聞こえるな）

“そうそう、出来ておるぞ”

（お前からの遮断出来ねーのかよ。それと神の体ってのにはどんな隠し機能が付いてるんだよ）

“ふむ、それは見た方が早いじゃろうな。自分の体を見ながら解析アナライズと念じるのじゃ！”

（なんで英語なんだよ！ 全く… 解析かいせき おおっ）

瞬間、視界の左上にうすい青色のウィンドウが浮かび上がって頭に情報が流れ込んでくる。これは便利だ、なんでFat e風ステータスなのかは知らないが。

“しくしく娘が反抗期になった”

（誰が娘だ、誰が！ ……つてむすめえ！？）

あわててステータスを確認すると、そこには確かに女となっている。けれどやっぱり信じられなくて、いや信じたくなくて確認をも

う一度してみるがやはり変わらない。

「あ、あの鏡見せてもらってもいいですか！」

「あ、うん、いいけど」

突然声を掛けられてしどろもどろになりなっているがそれを気にする隙はない。すぐさま洗面所まで行き、先ほど見られなかった鏡を覗きこむ。そこには茫然とした顔で自分の頬を触る金髪緑眼の美少女が居た、その顔だちは幼いながらも見たことのあるもので…。

どうやら今の俺はアルトリア（ただし少女）にそっくりらしい、ははっ。

第三話 『状況を把握する時』（後書き）

“ ”
の中の声は聞こえています。念話とは違うから使い分けるかも。

第四話 『初めて魔法を使う時』

「えっと、改めて……。私は^{あまつか おとめ}天使音姫、19歳です。^{てんし おとひめ}天使の音姫として書くんだよ」

「……おとめ？」

言われて気づく、そうだ、どこかで見たことあると思ったらD・C・?の朝倉音姫にそっくりなんだ。でもどうして？

説明しよう！

うわっ！ またかよ。しかもなんでヤッ◯マン。

うるさいわい。あー、ごほん。説明しよう！ それは僕の趣味じやっ…趣味だからだ！ まあ、顔と性格が同じなだけでD・C・の設定は持ち込んでおらんがのう

わざわざ言いなおさんでも……。まあ、朝倉姉は俺も好きだが。天使って名字もお前の仕業か。

「？ どうかした」

音姫さん（ 実際目の前にするとどう呼べばいいか悩むよね ）が不思議そうな顔で顔を覗きこんでくる。ちょっと気が散ってたみたいだ。

「いえ、俺の名前は……」

前世？ の名字を言いかけて、止める。今の俺はもう優人じゃない

い、っーかこの姿に似合わない。だからと言ってアルトリアと名乗るのも違う気がする。

「大丈夫？」

どこか具合でも悪そうにしてただろうか、心配そうな顔で音姫さんが見ている。なぜか口が勝手に動いていた、それがどんな内容か考える前に。

「いえ、大丈夫ですよ。それより名前、忘れちゃいました。良ければ付けてくれませんか？」

「ええっ！」

驚く音姫さん。いや俺も驚いてるけど。それよりさっきはなんで勝手に動いたのかなあ…？

ギツクウ！

そこまであからさまに反応せんでも…もうお前の行動にも慣れて来たな。

「じゃあ優姫ちゃんって呼んでも良いかな。優しい姫って書くんだけど、なんだか頭に浮かんで来たから。えっと、もっと外国っぽい方がいいかな？ それともそれとも」

「いえ、優姫でいいですよ。それと、出来ればちゃんは止めてください」

とても不安そうな音姫さんの言葉にかぶせて言う。奇しくも前世の名前に似ていたのは混沌の仕業だろう、少し複雑な気分だ。

別に僕は何もしておらんぞ。まあ、たまたまじゃろうがな

え、そうなの。何かすっげー嬉しい。

……

自己紹介が済んだ所で音姫さんが会話を進める。

「それで、なんで優姫ちゃんはトランクから出てきたのかな」
「それは……」

早速説明に詰まったところで右手に違和感を感じる。目線の高さまで持ち上げて軽く振ってみると違和感が無くなり手に中にパンフレットの様な冊子が現れた（わーびっくり）。パラパラと読んでみるがその内容について呆れてしまった。頭を押さえながらパンフを音姫さんに渡す。

曰く

- ・これは神が作った人形です。
- ・拾ったあなたはちょーラッキー、煮るなり焼くなり、食べるなり（性的な意味で）好きにしてください。
- ・魔法とか超能力が使えます。
- ・トランクに入って居るものは有効に使ってね。
- ・これを読み終えたあなたの利き腕に令呪が刻まれます。令呪っていうのは命令すると逆らえなくなるんだよ

パンフを熟読していた音姫さんが令呪の確認をした後、顔をあげてこちらを見る。その視線に真剣な気配を感じて気を引き締める。

「優姫ちゃん」

「な、なんでせうか」

「嘘じゃ、ないんだね…」

「そうですね…」

「…」

「……」

「魔法って？」

「え、ええと魔力をエネルギーに様々な現象を起こすプログラムの事であります。サー」

「今使える？」

「ええと、簡単なので良ければ」

「使ってみて」

「サー、イエス、ママ」

ガクガクブルブル、そんなに低い声で話さないでほしい。とりあえず頭の中で術式を起動。ほんツと高性能だなこの体。口の中で音姫さんに聞こえないように呟く。失敗したら恥ずかしいし。

『フライヤーフィン』

素足に翡翠色の羽が生え体が宙に浮かび上がる。とりあえず一回まわって着地する。内心、初魔法にドキドキです、魔力光は緑なんだな。

「ええと、飛行魔法でした」

「凄い！　凄いよ優姫ちゃん」

「ありがとうございま、す？」

「他にもあるの、もっと見せて！」

「危険が無いのであれば……」

だめだ音姫さんのテンションについていけない。ああ、でも魔法楽しいなあ、あはは。

……結局その日の魔法行使は夜中まで続いた。

第四話 『初めて魔法を使う時』（後書き）

優人のほうの意識が高めなのは性転換で困惑する様子を楽しもうとする混沌の策略です。決して作者の趣向じゃないんだからね！

第五話 『世界を創る時』（前書き）

そうか！ 本文を書いてからサブタイをつけるんだ！

第五話 『世界を創る時』

「うーん」

音姫さんに魔法を見せていたのだが、いつの間にか音姫さんは眠ってしまっていた。取り合えず二階の部屋にあったベッドに運んだもののこれからどうすれば良いか判らず途方に暮れていた。

いつそ寝てしまおうかと考え、リビングのソファ―に体を横たえたのだが一向に眠くならない。

（そういえばトランクに色々入ってるって書いてあったな…）

体を起こし部屋に転がっているトランクに足を向ける。トランクに詰まった緩衝材は背中を丸めた人型に窪んでいる。

（こうして見ると人形でも入っていたみたいだけど……）

入っていたのは俺なんだよな…とボヤキながら赤い布が敷かれた緩衝材を引つpegす。ビンゴ！ トランクの底があるはずの場所にはもう一段赤い布で敷かれた緩衝材が詰まっていた、おそらく何か魔法が掛かっているのだろう。試しにもう一度緩衝材を剥がすと今度こそトランクの底が現れる、だいたい外から見分ける分の三倍ぐらいだろうか。

二段目の緩衝材に入っていた物は銀行の通帳にカード、暗証番号を書いた紙、保険証などの生活に必要なものと一つの鍵だった。銀行の通帳には9の数字が並んでいて何処の小学生だと呆れてしまった。しかも保険証などの名前の欄はすでに天使 優姫となっていて再度あきれt（ry

最後に入っていた鍵だが金色で古い洋館に使うような装飾がされている、これにも魔法が掛かっているらしく神眼で見るとある空間へのゲートを開く物だと言うことが解った。

鍵を胸の高さまで掲げるとこれまた古い洋館の様な扉が現れる。鍵を鍵穴に差し入れ捻ると“ガチャン”と鍵の開く音がお腹に響く。ごくりと唾を飲み込み扉に手をかける。ゆっくりと開くと眩しい光に目がくらんで……と言うことはなく、普通に中の景色が広がっていた。

普通、と言ってもビルが建っていたり山が見えたり草原が広がっているわけではなく一つの洋館が建っているだけの『精神と時の部屋』にそっくりな場所だ。扉を後ろ手に閉めると空気に解けるように扉は消えていった。

「ここは何処なんだろうな……」

洋館に近づきながら呟く、視界に大きな扉しか入らなくなるほど近づくとも一人手に扉が開いて、中の様子が見える。そこにはまたもや白い空間の中にシンプルな机が一つあるだけだった。俺は机に近づいてその上に乗っているメモを手取る。

「なんだこれ？」

曰く、この空間、いや「世界」はあのくそ爺が俺のため……俺に献上するために作ったものらしく俺が自由自在にコントロールできるらしい。やり方は簡単、“想像する”事だ。

想像するだけで家具、それを置く部屋、廊下に階段、二階やテラ

ス。大地や草木、山に空でさえも創る事が出来るらしい。

ただし、この世界で作られた物は外の世界には持ち出せない様になっっているらしい。

ちなみに混沌が言っていた神の力も同じように使おうしく、この世界は神の力の使い方を理解するためのチュートリアルも兼ねているようだ。

「ちょっとやってみるか」

目を瞑り、前の世界の相棒を頭に思い浮かべる。家にいる時は大抵触っていた唯一無二の存在…

「相棒おおお!!」

ふたたび目を開いた時、そこには黒く、スタイリッシュな…

ノートパソコンが。

「ふふ、少し暑くなっていたな…さて、早速俺のマル秘フォルダを……」

手早く近づき、流れるような動作で電源を入れる。しかし何回押しても相棒は沈黙を保っている。バッテリーに問題があるのかと思いい、裏のカバーを外そうとすると…

「なん…だと…」

カバー自体が無かった。あわてて表も確認してみると少しずつ細部が違っている。ついていた物が無くなっているのだ、そこは俺が細かく想像していなかった所で。

「まさか、ここまで再現してくれるなんてね……」

この様子だと中身の機械部分まで想像しないといけないだろう。俺はそこまで記憶していない、プログラムとかどーすんだって話だ。とりあえず機械はおろか植物もできないだろう、ん？ 植物の方が難しいのかな

「仕方ないな……」

取り合えずスプーンやフォークなどの日用品を作り出すことから始めよう、何事も一歩からだ。

………パソコンは買いなおさないとな、お金だけは有るけど……。
あゝ俺のマル秘フォルダが

第五話 『世界を創る時』（後書き）

感想返信

皇焰さん うとう嘘ちゃうわ！ ちゃんと一割ぐらいは「ハーレム書く気がしなかった」って言う理由があるんやから！ …だからその振り上げた鉈を下して…ああああ、ゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイ……。

て言うか主人公が出した条件だけでも十分すぎるチーとだよな…
改稿するかも。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8672m/>

魔法少女リリカルなのは タイトル未定 『憑依？ TS チート物』

2010年11月2日09時03分発行